

紙つて

卒業生が久しぶりに訪ねてきた。海外のNPOでのインターンシップを終えて帰国したばかりだ。これからは「地球に生きることに決めました」と頼もしいことを言う。「地球に」には「on the earth」と「for the earth」の二つの意味があつて、それを軸に今後のプランを立てるそうだ。大学生の進路が多様になり、四年間の学生生活という言葉はもはや通用しないかもしれない。一九九〇年代にセメスター制が取り入れられてから、学部生の後期から留学に出ることが容易になり、半年間、あるいは一年間を海外で過ごす学生が明らかに増えた。三月以内の語学研修

地球に生きる

武田 好

の機会も用意されていて、留学と語学研修の両方を同じ国で、または異なる国で、こなす者もいる。

昨今は国内だけでなく、海外でのインターンシップがそれに加わる。米国やアジア、中東の企業等に自らアプローチして懸命に就業体験を積むのだ。英語ともう一方国語を使ってさまざまな経験を詰め込んだ四年半、または五年を過ごして就職に生かしていく。

そういうわけで五年目の四年生がいるが、同学年の学生から「〇〇先輩」と慕われている。入学が一年早いからというより、地球サイズのダイナミズムに挑戦する姿に敬意を表しているのだ。海外にいる先輩の現場をネット電話で見ることができ、リアルに地球で活躍できる時代だ。

(静岡文化芸術大教授)

2020.3.14

2020.3.14

中日新聞(夕刊) P.1